

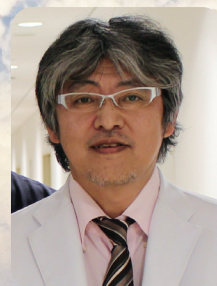
私がみた坂の上の雲

—第16弾—

新年号

新東京病院院長

心臓血管外科主任部長 中尾達也



新年明けましておめでとう
ございます。新心会の皆様、
お元気ででしょうか？ 今回は
年末12月29日まで手術をして
12月30日に広島に帰省、翌31
日に松戸に帰ってきました。
新東京病院に来て16回目の正
月を迎えましたが今回初めて
松戸の地で正月を迎えました。
年末年始は世間的には長
期の休みを堪能しているところ
でしたが、病院の方はイン
フルエンザと一部コロナの発
熱患者を含めた多くの救急車
を応需してくださり救急の看
護婦さんや当直医には感謝、
感謝です。1月2日には重症
心不全患者の手術をして、夕
方にICUから駐車場をみると
ボタン雪が降っておりこの
冬初めての東京の雪は幻想的
でした。そんなかなで1月
3日の夜遅くに、院長室で原
稿を書いている心臓血管外科
主任部長、院長の中尾達也で
す。昨年は、新心会総会や主
催旅行で皆様と時間を一緒に
過ごす機会が院長職のため少
なく大変申し訳なく思ってお
ります。新心会総会では、循
環器内科主任部長の朴澤先生
が循環器疾患の講演をしてく
ださり心臓外科とのハートチ
ーム連携の大切さを強調され

ていました。さて、2026
年新東京病院は57周年を迎
え、私もここ松戸の新東京病
院の地に来て17年になりました。
そして新東京病院院長に
なりなんとか2年半が経ちま
した。心臓血管外科ですが、
池谷先生が昨年12月に退職さ
れ、新たに今年1月から湘南
鎌倉総合病院心臓血管外科か
ら野口先生と山部先生に来て
いただくことになりました。
お二人とも前病院に13年近く
勤務されておりましたが私の
目指す医療に賛同されチーム
の一員になっていただきました。
この4月には浜松の方から
も京大出身の坂本先生がチ
ームに加わっていただきます
す。津田先生、星野先生らも
含め皆で力を合わせて頑張っ
ていきます。

2024年度の実績を報告
致します。昨年1年間の開心
術が272例、胸部大動脈ス
テントグラフト術34例で心臓
胸部大血管手術総数は306
例でした（1年前が303
例）。全体的に総数は維持し
てきています。低侵襲手術の
柱として腹部大動脈ステン
トグラフト（50例）、胸部大
動脈ステントグラフト（34
例）、MICS（完全内視鏡下右
小開胸25例、胸骨下部分切
開7例、AVR2例、MVR4
例、MVP1例、内視鏡補助
下右小開胸5例、AVR2例、
MVR1例、MVP2例）での
大動脈弁や僧帽弁手術は37例
でした。そのうち2年前から
は以前当院にいたこともある
松本協立病院の青木先生に
お手伝いしてもらい完全内
視鏡下右小開胸での大動脈
弁置換術は5例、僧帽弁置換
術は4例、僧帽弁形成術は13
例、心房中隔欠損閉鎖術2
例、大動脈弁腫瘍切除術1例
でした。また完全内視鏡下左
心耳切除は2例でした。胸部
真性、あるいは急性、慢性解
離性大動脈瘤などあらゆる形
態の大動脈瘤に対して開始した
オープンステントグラフト手
術は、良好な成績とともに
本邦でもトップクラスの症
例数（2025年は50例で
2014年7月〜2025年
12月までに447例）になっ
ています。この国産ステント
グラフトの海外とくに保険
償還が決まった台湾での普
及に、台湾の台北や台中の
病院まで技術指導に足を運
び、アジア心臓胸部外科学会
やイタリヤでの研究会等大き
な場所での講演に積極的に



写真①

努めてまいりました。この
ことがきっかけで AME Case
reports (ACR) というオン
ライン国際雑誌の編集委員を
務めています。2024年5
月にタイバンコクで開催され
た第2回世界心臓、循環器系
疾患会議をきっかけにタイバ
ンコクの3大心臓血管センタ
ー（Siriraj 病院、Army 病院、
Chest institute 病院）の心臓
外科医たちとタイでの本法導
入に向けての協力体制をつく
ることが出来ました。昨年5
月には、サウジアラビアのド
バイで開催された第3回世界
心臓、循環器系疾患会議での
基調講演をきっかけに知り合
ったアメリカブラウン大学の
心臓血管外科研究部門ルーフ
ル教授にクリスマススイブに当
院に来ていただき、合同心臓
セミナーを催し「虚血性心疾
患に対する幹細胞由来の革新
的治療法」という題目で講演
をしていただきました（写真
①）。時間が許す限り、ルー

フル教授を私が病院中を案内さしていただきました。早ければ来年からブラウン大学と新東京病院の間で、臨床や研究で相互協力できる体制を構築して若い先生や学生たちの交流を図りたいと考えています。一方柏癌センター呼吸器外科や築地中央癌センター食道外科と共同しての、心臓や頸部血管、大血管にまで浸潤した肺癌、縦隔腫瘍ならびに食道癌を手術、治療することも引き続き積極的に行い複数科での相互協力体制をより信頼できる強固なものにしています。さらに、千葉県内でエホバの証人の心臓病患者に対して心臓手術を提供できる唯一の施設としての役割も引き続き務めるとともに2014年8月から2024年8月までのエホバの証人信者における10年間の心臓血管手術50例の成績をまとめ、昨年10月に第78回胸部外科学会で発表して英文誌に投稿しています。今後全国のエホバ患者治療の指針として少しでも役立つしてくれることを願っています。

以上は、心臓外科主任部長としてのいつもの挨拶でしたが、2年半前に新東京病院

の院長になりました。院長になっていろんな人たちと知り合い、その人たちから教えを請い毎日勉強をさせていただいております。先日、松戸市の松戸新市長とも医療について意見交換をさせていただきましたが、今年1月にも広島市の松井市長と意見交換をする機会を持つ予定です。私と松井市長は同じ被爆2世という同じ世代の記憶を家庭の中で受け継いでおり、私は広島が平和だけでなく命を守る医療の知の発信地になれる可能性があると感じており是非広島出身の医師としての問題意識を松井市長と共有させていたなければと考えています。松戸と広島、二つの自治体それぞれに課題は違っても、心臓外科医である私が直面している命を守る現場をどう支えるかという本質は共通していると感じているのです。さて、昨年末には浅草 View ホテルで新東京病院忘年会を一番大きな会場であることが出来ました(写真②)。会費なしの病院全てのスタッフへの慰労会です。大変なこの一年間を皆様よく頑張ってくれました、日頃顔を合わせたり話や挨拶もままならない同じ新東



写真②

京病院という職場で、この時はみんな大きく心を開いて笑って、話して喜んでいただければそれは今年の病院のさらなる飛躍につながると思っています。職員へのボーナスは必ず約束する、忘年会は盛大にする、このことは私自身院長をすることの大きなモチベーションになっており前向きに物事を考える気持ちの支えになっています。

昨年12月末にパリのパラオリピック車椅子女子テニスで優勝された上地結衣さんとお母さんが院長室に遊びに(ご挨拶に)来られました(写真③)。私の元患者さんであり1昨年亡くなられた本間先生を通じてお会いすること



写真③

が出来たこの御縁が、遠く離れていても世界中のどこかでこれからも繋がっています。彼女の生い立ちをお母さんから聞きして、結衣さんもちろん凄いのですがお母さんの幼少期からの教育の素晴らしさを改めて知ることとなりもっと大変な感謝と感動をいただきました。昨年はスリランカにカンボジア2ヶ国も新しい地を訪れ8年ぶりの年間チャンピオンも達成、今年はウィンブルドン優勝でゴールドスラムという目標を語る結衣さんの生き方は、昔大学からテニスを始め今も週一テニスプレイヤーである私にとってテニスをこれからも続けていく上での大きなモチベーションを与えてくれているのです。

昨年12月初めには娘が3人目の赤ちゃんをシドニーで出産するということで、それっきりかけに30年前に心臓外科の修練医として働いていたシドニーのロイヤルプリンスアルフレッド病院に行ってみることにしました。今の心臓外科部署のトップがポールバナ先生で昔からの旧友です。彼は私を温かく向かい入れてくれ昔仲良く一緒に働いてい

た(面倒を見てくれた)手術室の主任看護婦レイチェルや現在の心臓胸部外科の臨床のトップであるトリスタンヤン先生(写真④)といろんなお話をする機会を持つてくれました。病院は近代的



写真④

な施設を誇る素晴らしい変貌を遂げていましたが、病院がある街には昔の香りが思い出されました。私はシドニー時代に日本にいる62歳の父親の死に目にも会えず、多くのインド人修練医に囲まれた環境から、ここでの自分の未来が見えず志半ばで父親の死をきっかけに(口実に)帰国したという思いを、この30年間ずっと抱えていたように思っています。昔シドニーの小学校に通っていた娘がわたしをシドニーへ再び呼び寄せてくれ、シドニーでの私の呪縛を取り除いてくれたのです。現地にに通う2人の孫は驚くべきスピードで新しい環境や友達に適

応し native speaker・並みの英会話を披露してくれました。日本人の遺伝子を持つ上地結衣さんや孫たちも素晴らしい次世代、次々世代を紡いでいてくれます。

人の御縁は不思議ですね。患者さんが外来で、「先生に手術してもらってもう10年も長生きさせてもらった。もうけもんだよ、ありがとう」と言ってくれます。患者さんにとつては、そのような気持ちでいることが毎日を生きていく大きな力になっているのでしょうね。私自身どんなに苦境に会っても、患者さんのその言葉で私も生かされていると感じます。ロイヤルアルフレッド病院の心臓胸部外科オフィスの壁には、過去世界のいろんな国からやってきてカリキュラムを卒業できた修練医の肖像画（写真）が飾ってありました。私の肖像画が私をみて意味深に微笑んでいました。「タツヤ よく帰ってきたね」と（写真⑤）。

